

アメリカ聾教育における併用法 (I)

——エドワード, M・ギャローデットの報告書(1867年)より——

上野 益雄

本稿では、ギャローデット, E. M. のヨーロッパ視察報告書を検討した。

彼はこの視察報告書において、聾教育方法に関しては、併用法を提唱した。その内容は、「人工的スピーチの指導を、それが不成功とわかるまでは、すべての生徒に指導すること」としている。彼は当時のヨーロッパの聾学校を、

- (1) 手話・指文字の使用を主体とする学校
- (2) 発音指導を主体とする学校
- (3) 手話・指文字と発音指導を併用する学校

以上の3つに分け、(3)のグループの学校に注目した。(3)のグループの中でも、従来手話・指文字を主体としていた学校で、発音指導を導入している学校を特に評価した。

しかしながら、彼の教育理念は、発音法、いかに言えば後の口話法のそれに近づいたものではない。発音法の導入を勧めた彼の指導法(彼のいう上部構造)は、口話法に近づいたようにみえるが、その教育理念(彼のいう基礎構造)は、手話・指文字を聾啞者に必要な言語として認めたものである。従って、口話法とは異なった理念に立つものであるということが明らかにされた。

キーワード: 聾教育 発音(法) 併用法 エドワード, M. ギャローデット

はじめに

19世紀中葉、アメリカ聾教育における言語指導の方法は、依然手話による方法として、ほぼ統一されていた。しかし、その内容は聾教育者の間で相違があり、さらに、従来手話による言語指導の対する批判も起こってきた。すなわち、手話が多く使われすぎていること、指文字・書記言語の使用がおろそかになり、そのため文章力に著るしく劣るということであった。言語指導における手話の位置づけをめぐることは、いくつかの意見に分かれ、具体的指導に関して活発な議論もなされていた。¹⁾

このことに加えて、聾学校²⁾の外側からは、ヨーロッパ、特にドイツの発音法の情報があつた。その中に、1844年のマン(Mamm, H.)のヨーロッパ視察報告書がある。マンは、アメリカの聾教育が、ドイツのそれに比べて劣っており、手話を廃して発音法を採用すべきであると強く勧告した。

この報告書の出た後、聾教育のリーダーたちが何回かヨーロッパ視察に出たが、発音法にいくらかの注意を示したものの、結論的には、アメリカの聾教育は他に比べて劣っておらず、ドイツの発音法にならう必要はないというものであつた。³⁾

1860年代に入り、口話法による聾学校の設立運動が起こつた。ハウ(Howe, S. G.)らのマサチューセッツ慈善委員会の口話法推進活動および口話法を標榜するクラーク聾学校の設立は、従来の州立聾学校側に少なからぬ関心を引き起こした。⁴⁾

以上のような状況を受けて、ギャローデット, E. M. (Gallaudet, E. M.) は、1867年6ヶ月にわたってヨーロッパの聾学校の視察を行った。帰国後、同年10月ただちに、彼はコロンビヤ校理事たちに対し報告書を提出し、翌1868年5月には、第一回の全国聾学校校長会を招集し、それらのところで併用法の採用を提唱した。

その後のアメリカの聾教育は、全体的な概観に

おいては、口話法の拡大に向うのであるが、1867年の時点においてみた場合、手話法を中心としていた従来の州立聾学校は、口話法の影響を受けながら併用的へと進むことになる。それはやがて、口話法との論争の中で、徐々に指導法の主役の座を口話法に明け渡すことになるであろう。併用法とは何か。いいかえれば、併用法の内容は何であり、その内容はどのように変化していったか。

本研究は、この課題に沿うものである。

1. 目的

本稿では、上記の問題を明らかにする第一段階として、ギャローデット、E. M. の提唱した併用法はどのような内容であったかを、彼の1867年の報告書に従って考察を進めていく。

問題点を具体的に示すと以下のようである。

ギャローデット、E. M. の報告書には、次の勧告が第一にあげられている。

「人工的スピーチ (Artificial Speech) と読唇の指導が、一日も早く行われること。すなわち、初等課程のすべての生徒は、この指導が成功しそうにないことが明らかになるまでは、指導の機会が与えられること。口話の訓練 (Oral Exercise) に好ましい資質を示す生徒には、在籍中引き続きこの指導がなされること」⁵⁾

併用法は、実際には、教育現場の中でさまざまな形態をとることになるが、上記の勧告の形態がその原形といえる。

しかし、ギャローデット、E. M. の勧告の表現は、誤解される恐れがある。「この提案は、口話法に譲歩し一歩近づいたものではないか」「併用法の理念は口話法のそれと同じであり、口話法の亜流ではないか」といった問題である。⁶⁾ 口話法は、言語指導の手段として、スピーチと読唇のみを認めたものであり、それ以外の手話・指文字は存在しない。それにもかかわらず、現実には口話法に失敗する聾児たちがおり、止むを得ない必要悪という形で、手話が消極的に黙認される場合がある。後の純粹口話法の立場にはこのことは理念的にはあり得ない。手話はタブーであり、悪であり、ひたすら口話の追求に目を向けた。

ギャローデット、E. M. の提案は、口話法の側からみると、何とも不徹底なものであり、手話法の側からみると、口話法に傾いたものと写る。事

実、彼は父であるギャローデット、T. H.⁷⁾ の意図を受けつがず、アメリカ聾教育の伝統に反したという非難を受けているのである。⁸⁾ 手話法と口話法の理念は、歴史的に対立している。併用法をアメリカで初めて提唱したギャローデット、E. M. の教育理念は、本当のところ何であったのか。彼のヨーロッパ視察報告書によって、ヨーロッパの当時の聾教育の状況を見ると共に、彼の併用法に内在する教育理念を明らかにすることが、本稿の目的である。

2. ギャローデット、E. M. による指導法の分類

ギャローデット、E. M. は、名の知れた聾学校36校（この数には分校は含まれていない）を選んで視察し、出来るだけ実際の指導や教育活動にふれ、生徒や教師と話し合い、自ら発音指導による方法の可能性を確かめている。

報告書の最初に、彼は自身の判断によるものであることわりながら、指導法の分類を以下のように示している。⁹⁾

・1 自然的方法 (The Natural Method)

このシステムは、パントマイム、ジェスチャーといった聾啞者の自然的手話を自由に用いることを基盤としている。しかし、最終的には、書記言語の話し・文法・慣用句に精通させ、それによって聾啞者を社会に導びき入れようとするものである。

・2 人工的方法¹⁰⁾ (The Artificial Method)

このシステムの主な目的は、スピーチという非自然的過程による発達である。発声器官の位置の変化から、話しことばの意味を見分けるため聾者の目を訓練する。この方法はドイツ法と呼ばれ、手話を指導の初期の段階から継続することは、聾啞者にとって有害な影響を与えるものであり、最小限の必要悪としてのみ認められている。従って、聾者の自然な言語は、出来る限り早くなくしていくべきであり、思考のための貴重な巾広い手段として用いることは否定される。

・3 併用法 (The Combined Method)

指導のどの段階においても、手話言語が有用であるという認識と、多かれ少なかれ話しことばにも注目する。この二つの方法を結びつけよ

うとする立場を併用法と呼ぶ。

3. ギャローデット, E. M. によって分類された視察校¹¹⁾

ギャローデット, E. M. は、視察した各学校について、教育方法を中心に一つひとつ報告している。これらの学校の中には、聾教育史上よく知られている学校や校長が含まれているので、報告から整理しなおして表に示し、ごく簡素にその内容を見ることにする。

[グループⅠ：自然的方法による学校]

校名		校長
Doncaster 校	(イングランド)	Charles Baker
Birmingham 校	(イングランド)	Arther Hopper
Manchester 校	(イングランド)	Andrew Patterson
Liverpool 校	(イングランド)	David Buxton
Glasgow 校	(スコットランド)	Duncan Andrew
Belfast 校	(アイルランド)	John Kingham
Dublin 男子校	(アイルランド)	Edward J. Childley
♀ 女子校	(アイルランド)	Patrick D. McDonnell
Geneva 校	(スイス)	Isacc Chomel
Nancy 校	(フランス)	Piroux, M.

イギリスの諸学校が上の表で目につく。かつては、発音法 (Method of Articulation)¹²⁾ の伝統に立ち、発音指導を試みた学校が多いが、ギャローデット, E. M. の報告では、いずれも手話・指文字を主体としている学校グループに入っている。しかし、夫々の学校によって指導法は同じというわけではない。ドンカスター校、バーミンガム校、マンチェスター校では、ある程度話せるもの、あるいはいづらか聞えるものには、発音指導がなされている。クラスゴー校、ダブリン校の場合も同様にいづらかは発音指導がなされているが、主体は指文字である。当時としては驚くべきことに、リバプール校では4歳からの幼児部門をもち、教室、プレイルーム、宿舎、風呂、病院まで付設されており、ギャローデットも注目している。指導法については、同校の校長バクストンは、「教師一人で10~12名の生徒を受けもつのであれば、発音法も可能であろう。しかも、在学年数が5・6年では不十分である」¹³⁾ という。このグループの学校ではすべて、それまでの経験から発音指導

は、時間と労力のかかることから指導の主体となっていない。特にベルファスト校、ジュネーブ校、ナンシー校では、発音指導に関してかなり消極的であることが、ギャローデットの報告からうかがえる。ベルファスト校の校長キングムは「半聾および半啞のもの (the semi-deaf and semi-mute) を含めて、“大多数の場合、発音法は無益というより最悪のもの” (worse than useless in a vast majority of cases) である」¹⁴⁾ という。また熱心な指文字の提唱者であったナンシー校の校長ピローは「発音法は、不治の疾患をいやす努力として、最初の試みとしては有意義であったが、教育と基盤にはならず、単なる客間のアクセサリにすぎない」¹⁵⁾ とさえいっている。

[グループⅡ：人工的方法による学校]

校名		校長
St. Hypolite	(フランス)	Martin, M
De-Fort 校		
Vienna Jewish 校	(オーストリア)	Deutsch, M.
Leipzig 校	(ザクソニー)	Etchler, G. A.
Lübec 校	(リュベック)	Benyue, M. C.
Erankfurt 校	(プロイセン)	Rapp, M.
Brussels 男子校	(ベルギー)	Brother Cyrille
Zürich 校	(スイス)	Schibel
Rotterdam 校	(オランダ)	Hirsch, D.

以上がギャローデット, E. M. によって発音法による学校として分類されたものである。この中でも、徹底した発音法を採用していた学校は、ウィーン校とロッテルダム校である。ウィーン校の校長ドイツは「如何なる手話・指文字も許されない。自然なジュスチャーは、指導の初めに用いられるのである」¹⁶⁾ と述べ、生徒全員に発音指導がなされ、宗教々育も話しことばによっているという。ギャローデット, E. M. の視察報告書では述べられていないが、ロッテルダム校の校長ヒルシュは、アメリカの聾教育者の間でも知られており、手話による指導法を採用していたロッテルダム校に発音法を導入した人物である。

ギャローデット, E. M. の報告によれば、このグループⅡの学校の中には、少人数の学校が目につく。リュベック校は、当時の生徒数11名、フランクフルト校は生徒数18名であり、チューリッヒ校も、生徒数38名であり、それに対して教師が5

名もおり、ギャローデットは、これらの学校はよい成績をあげていると評価している。上述した学校以外の同じグループⅡの他の学校では、それ程徹底した発音法を採用していないとギャローデットはみている。聖ヒポリート校は、手話法の伝統をもつフランスでの唯一の発音採用校であったが、同校々長のマルタンは「自然法による学校がよい成果をあげていることは認めるが、スピーチができることは大なる恩恵である」¹⁷⁾と述べ、自然な手話によることも認めている。ブラッセル校では、フランス語のクラス、フラマン語のクラスをあわせもつ学校である。ギャローデット、E. M. は発音指導を採用してはいるものの、半聾・半啞のもの以外は、本の朗読は理解できないし、校長はしばしば書記言語にたより、時には手話をういていた、といっている。

ギャローデット、E. M. の報告から、発音法による学校にあっても必ずしも厳密な立場に立つ学校の少なかったことがわかる。彼は、一面ではこれらの学校の成果を認めてはいるが、生まれつきの聾啞児の場合は、発音による指導はむづかしく、手話が教師の意図に反して生徒たちに必要とされているとう見方をした。グループⅡに属するこれらの学校にあっても、教師の多くは、発音指導の限界を認めた手話に対してきびしい態度をとっていないことに目を向けたのである。

[グループⅢ：併用法¹⁸⁾による学校]

校名		校長
・ Paris 校	(フランス)	Leon Vaisse
Vienna 国立校	(オーストリア)	Alexander Venns
Prag 校	(ボヘミア)	Rev. Wenzel Kolatko
Berlin 校	(プロイセン)	Reimer
・ Milan 校	(イタリア)	Guilio Tarra
Turin 校	(イタリア)	Benedetto Conte
Dresden 校	(ザクソニー)	Jenke
London 校	(イングランド)	Watson, J. H.
Edinburgh 校	(スコットランド)	
・ Bordeaux 校	(フランス)	Cannon de Haerne
・ Marseilles 校	(フランス)	
Munich 校	(ババイヤ)	Rev. Joseph Gunkel
・ Burges 校	(ベルギー)	Abbe' Carton
・ Petersburg 校	(ロシア)	Selesneff, C.

・ Abo 校	(フィンランド)	Rev. Alopoeus, C. H.
・ Stockholm 校	(スウェーデン)	Borg
・ Copenhagen 校	(デンマーク)	Hansen, R. M.
Copenhagen 口話校	(デンマーク)	John Keller

註) ・印はフランスの影響を受けた手話法を採用していた学校。無印は発音法を採用していた学校

本稿で後程扱うことになるが、ギャローデット、E. M. は視察校の評価の際に、上記グループⅢの学校をさらに二つに分けているので、ここでもそれにあわせて整理してみる。その二つとは、従来から手話を主体としていた学校と発音法の伝統をもつ学校であり、それぞれについて以下に考察する。

A. 手話法の伝統に立つ学校

パリ校は、歴史上手話法の中心校とみられ、伝統をもつ学校である。ギャローデットによれば、この学校では、手話の価値が認められ指文字も使用されている、と同時に校長のヴァイスは、発音指導に熱心であり、その成果をあげていた。生徒は、全員指導開始後2年間は発音指導を受け、明らかに成果のない場合その指導を中止していた。パリ校の指導方法にならっている学校には、ボルドー校、マルセイユ校、ブルグ校、ミラノ校などがある。ミラノ校の校長タラは「発音と読話に成功する生徒は、現在、30%以下であるが、スピーチ指導に全力をあげている」¹⁹⁾という。このタラは、1880年の第二回聾教育国際会議(通称ミラノ会議として有名である)では、議長をつとめ、歴史上口話法推進者の一人として知られている人物である。

ブラッセル校も、手話・指文字を中心とした学校であったが、発音指導をすることが教師に義務づけられており、同時に、日曜日の礼拝では手話通訳がつけられていた。

ペテルスブルグ校は、1806年創立の古い学校である。発音指導の導入は9年前からであり、全生徒への実施は2年前に始めたばかりであった。同校の校長は「ここでは、発音が主要な目的ではない。すなわち、指導システムは、自然法という広い基盤に立ち、発音法を効果的に用いるのである」²⁰⁾という。

アボ校は、1860年設立の新しい学校で手語・指文字を主体として発足したが、一部の生徒に発音指導を実施して2年であった。ストックホルム校、コペンハーゲン校といった古い学校も、一部の生徒にのみ発音指導を実施し始めていた。コペンハーゲン口話校の設立は、興味深いことに1846年にドイツの学校を訪問したコペンハーゲン校の教師の一人が、発音法の導入を提案したが古い教師たちの反対に会ったため、発音法の小さな学校を作ったことに始まる。1867年当時は、口話校の方は主として半聾・半啞の生徒を受けもち、古いコペンハーゲン校の方も2年前から発音法を導入していた。同校の校長ハンセンは「口話校の方へ行く生徒がいるため、この学校へくる生徒の条件はよくないが、約半数が発音指導を受け効果をあげている」²¹⁾ といっている。

B. 発音法の伝統に立つ学校

ヒル、M. は、聾教育史上口性法の推進者として有名であるが、当時においても聾教育者の間で、発音法の提唱者として知られていた。しかし、ギャローデット、E. M. は「ドイツ法と呼ばれてきた方法の有能な実践者でありまた理論家として知られたヒルの学校が—“指導のどの段階においても手話の有用さが認められている”というこの報告に、あなたは疑いもなく驚くことであろう」²²⁾ と述べている。ヒルが手話についてどのように考えていたか、ギャローデットの報告からその一部を取りあげてみる。²³⁾

- ・ 聴児が自然に言語を学ぶように、聾児が自然に学ぶ表現が手話である。
- ・ 生活経験の反映である手話が、聾児の言語発達を導びく。
- ・ 教室外での聾児同志、あるいは成人聾啞者同志の有力なコミュニケーション手段は手話である。
- ・ 手話は聾啞者の思考表現に欠かせず、宗教々育にも欠かせないものである。

ヒルは、ギャローデット、E. M. との会話で「今まで私は、しばしば誤って紹介されてしまった」²⁴⁾ と言っている。

ウィーン校は、指導の開始時期には手話は必要であるが、出来るだけ早く手話をなくしていく方針であった。しかし、礼拝では、牧師は説教をゆっくり話し、時には板書を、時には手話を用いてお

り、特に説明をする場合には、多くの手話を用いていた。ブラハ校でも、礼拝において使徒信条、主の祈りは口頭で唱えられるが、手話も用いられていた。ブラハ校の校長は「生徒の半数以上は、発音指導の成果があがらないが、無理な強制はせず、書記言語、宗教々育、職業教育で満足している」という。ドレスデン校でも、礼拝では手話が用いられていた。ベルリン校では、発音指導に力が入れられている一方、手話・指文字も自由に使用されていた。同校の校長ライメルは「宗教々育や日常生活では手話を用いるのがよい」²⁵⁾ という意見である。ギャローデット、E. M. は、ヒルの考え方に賛意を示し、評価すると同時に彼の考える併用法が最もよく生かされている学校として、ベルリン校を高く評価している。

4. ギャローデットの「併用法による学校」に対する評価

当時の状況を見ると、グループⅠの手話・指文字を主体とする学校とグループⅡの発音法を主体とする学校よりも、グループⅢの手話・指文字と発音法の両方を採用する学校が多い。といよりもむしろ、グループⅠ、グループⅡのどちらからにせよ、グループⅢへ移行する学校の多いことがわかる。ギャローデット、E. M. のいうこの併用法に分類されている学校は、歴史の流れに沿って発音法中心の指導法が主流になるわけであるが、この時期においては、ギャローデット、E. M. の目には、併用法へと移行する方向として写っていた。事実、手話と発音法が共存していた学校が多く存在しており、特に彼の注意を引いた。

ギャローデット、E. M. は、グループⅢの併用法として分類した学校を、次の二つに分けて評価している。

- A. 手話と指文字を指導の基礎におき、多かれ少なかれ発音法を加えている学校。
 - B. 発音を指導の基礎におき、発音の成果を不足を満たすため、自由に手話を認めている学校。
- Aに属する学校では、手話・指文字の使用が多く、Bに属する学校の方は、発音指導に多くの時間を費やしている。ギャローデット、E. M. の評価は以下のとおりである。²⁶⁾

1) Aの学校と、Bの学校とで、スピーチ・読話に良い成績を示す生徒の数はほぼ同一である。

- 2) Bの学校においては、スピーチ・読話力が教師とごく身近なものに限られ、手話・指文字の使用により、さらに便利に広くコミュニケーションできると思われる生徒に対してまで、発音指導に多くの時間が費やされている。
- 3) Aの学校では、生徒の実質的な教育 (real education) に時間をかけることができるという利点があり、Bの学校よりも卒業時の成績は平均して良い。
- 4) Bの学校で使われている手話は粗く不完全であり、従ってAの学校で使われている手話より正確さに欠ける。
- 5) スピーチと読話に関しては、Bの学校の生徒は必ずしもAの学校の生徒より勝れてはいない。
- 6) A, Bの学校ともに、教育の真の目的は、生徒の知的・道徳的発達であると思われる。手話はそのための手段とみなされ、発音は聾啞者と聴者とのコミュニケーションの貴重な手段とみなされている。
- 7) A, Bの学校ともに、宗教々育には、手話の使用の必要であると認めている。
- 8) 発音に成功可能な知的聾啞児と、他の方法による指導が必要な聾啞児の存在は、併用法の学校においては、共通して広く認められている。

以上の評価を示して、ギャローデット, E. M. は、A, B両方の学校のよさを認めつつ、Aの学校の方が、彼自身の考え方により近いと判断を下した。

5. ギャローデット, E. M. の結論

従来、手話・指文字を指導の主体としていた学校の多くが、発音法を導入していることが注目されるのであるが、では実際には、どのくらいの割合の生徒に、発音法の指導が可能であるのか。ギャローデット, E. M. の関心は、これに向いており、何人かの校長に意見を求めているので以下に示す。²⁷⁾

ヒル, M. : 100人中85人は、教師、家族、親しい友人と何とか日常会話ができ、65人はそれらの人々と容易にできる。見知らぬ人と日常会話ができるものは、100人中11人である。

ヴァイス, L. : 10人中9人は、スピーチを学ぶことから、多かれ少なかれ利益を受ける。5・

6人は家族や友人と、7・8人は教師と日常的なことを話しあえる。見知らぬ人と話せるものは、ずっと少なく、すべて事柄を容易に話せるものは10人中2人を越えず、あるいは1人ぐらいかも知れない。

タラ, G. : 発音の成功者は30%ほどで、この中には、見知らぬものとは話せないものも含まれている。

ド・エルヌ, C. : 46人の生徒に教えた結果、22人は満足な進歩を示した。これらの生徒は、教師、家族、友人とは話しあえるようになるだろう。

ヴェヌス, A. : 100人中80人は教師、家族、友人と日常会話ができよう。50人は見知らぬ人と話せるだろう。(ギャローデット, E. M. は、この学校は2年の経験しかないので、この意見は確かなものと見ていない。)

ギャローデット, E. M. は、ヒルの意見が実践に十分見合うものであると評価している。発音法によって生徒の慣用語の習得に利点があるというヴァイスに対して、ギャローデット, E. M. は、賛意を表わしつつ、反面一般的情報の不足をきたすと述べている。彼は、最終的に10~20%のものが、発音法に成功するとみていた。

ギャローデット, E. M. は、彼の6ヶ月間にわたるヨーロッパの聾学校の視察をとおして、以下のような結論を下している。

「発音指導は、すべての聾啞児に試みられるべきである。この能力を有しながら、発音の機会が失われることのないよう、何年か続けること。もし教師、家族、友人と話す以上に期待できない場合、指導は手話・指文字という容易で貴重な言語によってすること。指文字は家族や友人もすぐに覚えられるものである。発音法の教師たちも大多数の聾啞児には、発音指導が見込めないことを認めている。従って教育方法の基礎は、手話であることには変わらないのである」²⁸⁾

6. ギャローデットの併用法の教育理念

言語指導における方法上の論争は、形を変えてはいるが現在まで続いている。ここで取り扱う手話一発音論争の問題は、単に方法という形態上の問題ではなかった。筆者は、教育方法とその基盤としての理念とは不可分のものと考え。ギャ

ローデット, E. M. もまさにそのように考えている。彼は、教育の基盤となる理念を基礎構造 (Substructure), それに基づいて表面に現われる指導のシステムを上部構造 (Superstructure) という用語を用いている。彼は、教育者個人が最も望ましい教育手段としてさまざまな意見を持ち、それらが実際の仕事として聾教育史上に現われているとみており、「それらの(註それぞれの聾教育者の意見の)相違は、聾者の心理学的状態について形づくられた相反する考え方 (opposit conception) に、その起源をもつと思われる」²⁹⁾と述べている。この相反する考え方の起源とはハイニツケ, S. G. とド・レベのそれをさしており、具体的には、前者は「聾」を人の異常な状態ととらえ、「聾」という事実に積極的な意味をもたせている。つまり、「聾」であることが人を奇怪なもの (monstrosity) にさせる故に、スピーチが知性の発達にとって絶対的な不可欠なものになり、教育の可能性は、従ってスピーチの獲得能力如何にかかわる。このことから必然的に、すべての努力は先ず第一に、この異常な状態に向けられ、可能な限り「話す人間」という正常な状態に向けられることになる。後者の立場は、聾者を正常な人間とみなす。言いかえれば、他の人々が持っているある種の能力には欠けるが、人間として完全なものと考えられ、「聾」という事実は、否定されてよいもの (negative) と受けとられる。話すことができないということは、知的発達にとって何ら障壁とならず、従ってこの教育思想によれば、「聾」の状態に合った教育手段を見つけることが可能であり、教師と生徒の共通に可能なコミュニケーションのチャンネルを作り上げることが、教育の第一歩となる。³⁰⁾

ギャローデット, E. M. は、以上のように、二つの立場の教育の基礎構造を述べた後、ハイニツケとド・レベについて論を進めている。要約すると以下のようである。

「人工的方法の創造者ハイニツケは、聾者を異常な状態とみた。書記語は、思考の手段には決してならず、音声言語を知らなくては、聾児は書く機械以上の何物にもなれない。すなわち、心を通りすぎるイメージの連続以ては決してならない。従って上部構造で用いられる手段は、音声言語以外の何物にも代えることはできない。土台か

ら建物までスピーチ, スピーチ! それ以外はあり得ないのである」³¹⁾

「ド・レベは、自然的方法の父である。彼は聾者の状態を、不自然なものとも奇怪なものとも (unnatural or monstros) みていない。「聾」ということに、知的発達のための障壁はないとみる。ド・レベは、聾者をすでに言語をもっているものとみなす。不完全なことは事実であるが、教師によって完全なものにし得ると考える。思考は、スピーチに存在するのでないし、生徒とのコミュニケーション手段は、視覚による方法で確実になされる」³¹⁾ ギャローデット, E. M. は、もちろん後者の立場を正しいとみており、手話法の基礎構造の上に、発音法の指導という上部構造を勧告したとみることができる。彼は、発音法実施の勧告の基盤を誤解されないために、あえて次のようにつけ加えている。「わがアメリカの学校で追求されている教育システムが基盤としているものについては、今回の視察において何ら疑問を引き起すものではない。われわれの建物は、確実な思想の岩の上に建てられており、砂の上に建てられてはいないことは言うまでもない」³²⁾

7. ギャローデット, E. M. の当時の発音法教師に対する見解

ギャローデット, E. M. は、聾教育における二つの立場について、非常に明確に自分の考えを表わした。しかし、彼は当時視察をしたヨーロッパの教師たちについては、「もとのハイニツケの理論を基盤とする学校はひとつもない」³³⁾とみていた。その理由として、彼の話し合った教師のわづか3人だけが、聾児の大多数に発音指導が可能だと考えているが、その中で手話を廃止しようと考えるのは、ヒルシュのみである、と述べている。彼は、ドイツの教師たちの多くが、発音法によっては成功しない聾児のいることを認めているという事実からも、併用法が、聾教育の来る時代において広く受け入れられるとみたにちがいない。ドイツの聾教員会議において、発音法に成功しない聾児をどうするか、という議題が取り上げられたことを評価した彼の理由は、現実に発音法では指導できない聾児が存在する以上、手話・指文字の否定は教育そのものの矛盾になると考えたのである。「純粋に発音法の理論に立つならば、多くの

聾児の教育は失敗となってしまう。従って失敗と
ならないためには、実践は^(註)手話をとり入れる
こと) 彼らの信条を大きく変えなくてはならない
からである」³⁴⁾ このような見方に立って「発音
法の教師たちは、本来公言された原則に必ずしも
厳密な態度はとっていないと確信するようになった」³⁵⁾
のである。事実そのとおりであったであ
ろう。しかしその上でもう一步ふみこんで考えた
場合、果たして全く事実そのとおりであったかと
問う場合、いくらかの検討の余地は残っていそう
である。

8. 若干の考察

手話による指導法が広まっていた中で、1840年
代から、ドイツを中心に発音による指導方法が再
び注目されていた。ギャローデット, E. M. がヨー
ロッパを視察した1867年という時期は、聾教育が
指導法の上からみても、変わりつつある時期で
あった。このことは、彼の報告にもはっきりうか
がえる。

20世紀に生きるわれわれは、その後発音法を押し
し、める口話法の波がおし寄せ、やがて手話を
追放した純粋口話法の時代になったことを知って
いる。ギャローデット, E. M. は、時代が併用法
へ向うとみていたと考えてよい。変化の時代とい
うことでは、テンポは異なるが、20世紀後半の現
在と似ている状況である。

ギャローデット, E. M. のハイニッケ論, ド・
レベ論は、現在のトータルコミュニケーションの
立場から純粋口話法への批判に一脈通じるものがある。
ファース (Furth, H. G. 1972)³⁶⁾ は「聾
と学習」という著書の中で、「言語が思考にとって
不可欠なものではない」と述べ、また「音声言
語があってもなくても、学業成績がよくても悪く
ても、聾者は知的人間であると認めることが第一
に必要なことだ」と述べている。現在は純粋口話
法が批判されている時代であり、ギャローデット,
E. M. の後に続く時代は、手話法が批判されてい
く時代であり、彼の意見は見事に落されて行った。
このことは、歴史的事実のどちらを無視するかの
態度による。それが正しいか正しくないかの判断
は、その個人の歴史観による。しかし、口話法時
代の教育者の関心がひたすら口話法の推進に向い
ていたのであれば、当然その意図に沿った見方が

強く出ていると考えてよい。

さて、ギャローデット, E. M. の考え方は、従
来の手話・指文字を指導の中心にする考え方に立
つもので、発音法を取り入れることによって手話
をなくしていこうとするものでないことが明らか
になった。発音法に不成功のものが、仕方なく、
必要悪として手話を用いて指導されるのではない
ことがわかった。当時のヨーロッパにあっても、
発音法を導入した学校が、宗教々育、日常生活で
は手話を承認しているのをみても、手話に対して
まだ積極的評価を下していた状況がうかがえる。

ギャローデット, E. M. は、何故、すべての生
徒に発音指導の試みを勧めたのか。彼以前にヨー
ロッパ視察を行ったピート, H. P. (Peet, H. P.)
などの聾教育界の指導者たちと違った提案をした
のは何故か。ギャローデット, E. M. のいう基礎
構造は、彼らのそれと同じであった筈である。い
くつかの要因が考えられる。ここでは、ギャロー
デット, E. M. の次のことばだけあげておこう。
「現在のような発展の時代にあつては、社会は単
に本質的なもの (mere essentials) の達成だけで
は満足してくれない。文明の精神は、絶対的な完
全さが得られるまで進歩を要求する」³⁷⁾

19世紀後半は、彼をしてこのように言わせる時
代でもあった。そして、彼自身が意識していなかつ
たにも拘らず、この言葉の中に「純粋口話法への
方向」がひそんでいたと筆者には思える。

最後に、報告書でなされた勧告には、他に次の
二項目があげられていることをつけ加えておく。

- ・教育年限の延長。
- ・教員養成の必要性。

今後の課題

報告書が提出された翌1868年5月、ギャロー
デット, E. M. は、第一回全国聾学校々長会を招
集した。そこにおける彼の提案と会議の討論、各
聾学校の反応を検討することが残されている。

註

- 1) 上野益雄 (1980) : 19世紀のアメリカ教育に
おける手話の位置づけ, 特殊教育学研究, 17
(4). において扱っている。
- 2) 当時は Asylum もしくは Institution と呼ばれ
ていたが、間もなく School という名称になっ
ていく。この論文で扱っているギャローデッ
ト, E. M. の報告書でも、学校名は Institu-

tion であり、文中ではSchoolという語を用いている。この論文では学校という用語を用いた。

なお聾啞学校から聾学校になるのは、1880年代になってからであるが、ここでは現在使われている聾学校という用語を用いた。但し、論文の内容から歴史的な事実として必要な場合には、聾啞、聾啞者、啞者等を用いた。

- 3) 4) mann, H. のヨーロッパ視察, それをうけての聾教育者たちのヨーロッパ視察, および口話法推進運動等については, 上野益雄 (1976) : アメリカ聾教育における口話法の成立について, 東京教育大学教育学部紀要, 22. に詳しく述べられている。
- 5) Edward, M. Gallaudet (1876) : Report of the president on the Systems of Deaf-Mute Institution Pursued in Europe. P. 54.
- 6) 口話法においても, 知能のおくれをあわせもつ聴覚障害児の場合は, やむをえずスピーチと読話以外の手話を容認する場合がある。従って併用法と口話法が形態上同じように見えることがある。19世紀後半から20世紀にかけて, 併用法は理想的にも口話法との区別があいまいになっていった。いかえれば口話法の中に併用法の理念が吸収されていったという假説を筆者はもっている。
- 7) Thomas. H. Gallaudet はEdward, M. Gallaudet の父であり, 同時に, アメリカ聾教育の父と言われ, 最初の聾啞施設 Hartfod Asylum の初代校長である。
- 8) Jerry Griffith (1969) : Persons with Hearing Loss, P. 12.
- 9) Edward, M. Gallaudet (1867) : op. cit., pp. 10-11. からまとめた。
- 10) 同じスピーチの使用をめざす教育方法も, 時代によりまた教育者によっていくらか異なる。人工的方法という用語は, もちろん手話法の立場に立ったものであり, ギャローデット, E. M. がこの方法の規定を行った文中の非自然的過程という言い方にも現われている。ここに述べられている規定は, 彼自身の規定を示したものであるが, 同時に当時の手話法の側の考え方でもあった。
- 11) ギャローデット, E. M. は, 視察校を3つの

グループに分けているが, 視察したひとつひとつの学校についてある場合は詳しく報告している。ここでは, 彼の報告した順序に従わず, ある程度まとめて, 簡潔な要約を試みた。

- 12) 当時は, 口話法 (Oral Method) という用語は定着していなかった。一般に Articulation という用語が用いられており, 一般に両方の場合を口話法ということが多いが, 本稿では, 歴史的研究であるので, 時代的に正確に発音もしくは発音法とした。
- 13) Edward M. Gallaudet (1867) : op. cit., P. 16.
- 14) ibid., P. 17.
- 15) ibid., P. 18. Piroux, M. のこのことばは, 歴史的背景をさしている。すなわち, 「聾者は, スピーチが不可能でなく, 神の救い, 恵みならずかれる証拠としてスピーチが可能である」ということを実証するために, 16世紀, 17世紀ボンセやアンマンらがなしたスピーチ指導の実践をさしている。
- 16) ibid., P. 20.
- 17) ibid., P. 19.
- 18) Combined Method, Combined System という用語は, ギャローデット, E. M. のつけた名称であり, 従って, この中に分類される学校には, ある場合手話法の学校, ある場合口話法の学校として分類されうるものがあり, さまざまである。しかも指導法の変化しつつある時期であり分類はむづかしい。当然, 後の時代からみて, 口話法に分類されるようになる学校が多く含まれている。
- 19) Edward M. Gallaudet (1867) : op. cit., P. 36.
- 20) ibid., PP. 40-41.
- 21) ibid., P. 43.
- 22) ibid., P. 29.
- 23) ギャローデット, E. M. はこの報告書でヒルと話し合ったことの他, ヒルの著書からも引用している。ヒルの著書は, 当時出版されたばかりのもので, Hill, M. (1866) : Dergegenwartige Zustand des Taubstummen Bildungswesens in Deutschland. である。
- 24) Edward M. Gallaudet (1867) : op. cit., P. 32
- 25) ibid., P. 35.
- 26) ibid., PP. 47-48.

- 27) *ibid.*, PP. 50-51.
28) *ibid.*, P. 52.
29) *ibid.*, P. 44.
30) *ibid.*, PP. 44-45.
31) *ibid.*, P. 35. 32) *ibid.*, P. 52. ギャローデット,
E. M. の「岩の上に立てられた家」という表
現は, 新約聖書, マタイによる福音書7章
24-27からの引用である。
33) *ibid.*, P. 46.
34) 35) *ibid.*, P. 47.
36) Furth, H. G. (1972) : *Deafness and Learning*, CH. 9 (PP. 101-104) を参照のこと。
37) Edward, M. Gallaudet (1867) *op. cit.*, P. 50.

Summary

The Combined Method in the History of American Education for the Deaf

—from a report by Edward, M. Gallaudet—

Masuo Ueno

In 1867, Edward, M. Gallaudet (the president of the National College for the deaf-mutes) went to Europe for the purpose of investigating the teaching methods of language for the deaf in Europe. He made a report on the state of deaf education in Europe, and made his recommendation for the combined method of speech and sign,

What is the combined method as proposed by Dr. Gallaudet? What is the substructure of his combined method?

“One of the contents of his recommendation is—

That instruction in artificial speech and Lip-reading be entered upon as early a day as possible; that all pupils in our primary department be afforded opportunities of engaging in this, until it plainly appears that success is unlikely to crown their efforts.”

1. He divided the teaching methods of European schools for the deaf into three types.

- (1) Schools based on the free use of the sign language.
- (2) Schools based on an artificial process of speech.
- (3) Schools endeavoring to combine the two methods of sign and speech.

He concluded that among the three categories, the best method is the one based mainly on sign and fingerspelling, adding speech to a greater or less extent.

2. The philosophy underlining the manual method is historically opposed to that of the articulation method.

Dr. Gallaudet thought that these differences had their origin in opposite conceptions of the formation of the psychological condition of the deaf-mutes.

(a) Dumbness was considered, on the one hand, as an abnormal state of being. The command of spoken language was absolutely essential to make the deaf-mutes normal.

(b) On the other hand, dumbness was not regarded as an abnormal state. Education, by this theory, sought means to adapt to the condition and to capabilities. The competent channel of communication is approved.

Dr. Gallaudet supported the latter view.

The real philosophy of Dr. Gallaudet, which recommended the speech, seems to be similar and close to the articulation method. However, that is not actually the case. He proposed the instruction of speech on the basis of the philosophy of the manual method.

This philosophy of the combined method disappeared along with arise of oralism. How did the combined method changing after this time? That is our next concern.

Key word: Education for the Deaf, Articulation, Combined Method, Edward, M. Gallaudet